様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００５８３

研究課題名（和文）ナチドイツの言語統制に関する修辞学的・コーパス言語学的研究―言語学と歴史学の協働

研究課題名（英文）Rhetorical and Corpus Linguistic Studies on Language Control in Nazi Germany. Collaboration of Linguistics and History Research

研究代表者
高田　博行（Takada, Hiroyuki）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：８０１２７３３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：宣伝省の報道方針には、対比法、平行法、メタファー、誇大語法、婉曲法などの修辞学的手法が組み合わせられたいくつかの類型（隠蔽、幻惑、誘導）が区別できた。宣伝省の方針と実際の新聞記事（作成したコーパス）との照合を試みた結果、方針が記事に反映された事例が多く確認された（例えば Frieden「平和」という語を慎しむべしという方針）が、新聞編集部が宣伝省の意を必ずしも汲まなかった事例（例えば Lebensraum「生存圏」をめぐる方針）も少なからず見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ナチドイツの報道統制のなかでも言語表現に関する統制、つまり「言語統制」に注目した。それは、宣伝省の報道会議において方針決定された報道の「内容」（なにを？）に関する統制ではなく、報道の「形式」（どのように？）に関する統制のほうに注目するという意味である。本研究は究極的には、統制された言語表現を前にして情報を見分け聞き分けるためのリテラシーに迫ろうとするものである。

研究成果の概要（英文）：In the policies of the Ministry of Propaganda of Nazi German, we can distinguish several types (concealment, deception, control) that are combined with rhetorical methods such as contrast, parallelism, metaphor, hyperbole and euphemism. When we compare the ministerial policies with the newspaper articles, we find that the editors of the newspapers followed the instructions of the Ministry in most cases (for example, the policy to avoid using the word Frieden 'peace'), but they sometimes ignored them (for example, the policy regarding Lebensraum 'living place').

研究分野：言語学

キーワード：ナチズム　報道文　スローガン　プロパガンダ　政治的言語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ナチ党が政権を掌握しておよそ１ヶ月後に早くも、「国民啓蒙と宣伝のための省」（「宣伝省」）が新設された（1933 年 3 月 13 日）。1933 年 7 月からドイツ敗戦直前の 1945 年 4 月まで、この宣伝省において「報道会議」が平日に毎日（開戦後は日に２回）行われた。報道会議では、どの内容をどのような形式で報道させるかに関して細かな方針決定がなされ、会議に参加した報道機関の代表者たちにその方針が通達された。アジェンダ設定とフレーム設定は政治宣伝が効果を生むための重要な要素である。本研究をスタートさせたときの大前提は、宣伝省が政治的・経済的・社会的に公共性をもつ問題について、マスメディア側に当該テーマのアジェンダ（重要度に応じた個別テーマの序列化）とフレーム（理解の枠組）の設定に関して統制を行うこと通じて報道を受け取る人々の認識や判断を統御しようとした点にナチ体制下の宣伝の特徴があるということであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、ナチドイツにおける言語統制に関して次の三点を解明することである。

①【言語統制方針の抽出と分析】宣伝省会議の報道統制方針のなかから、言語使用に関する統制を抽出し、その言語統制の方針を効果という点でとりわけ修辞学の観点から分析する。

②【言語統制方針に従った報道文の抽出】言語統制方針に従って報道文に書かれた言語表現を抽出する。

③【報道文における言語統制方針の反映をめぐる分析】報道文で使用された語彙にどのような通時的変化が認められるのかを抽出し、その通時的特徴が宣伝省会議の言語統制の方針の変遷と大きく一致するものかどうかを分析し、言語統制の実効性について巨視的に考察する。

３．研究の方法

本研究は、歴史学上の研究対象に対して言語学的アプローチを試みるものである。本研究では、言語学者（研究代表者）が言語分析から引き出した仮説を歴史学者（研究分担者）が歴史的文脈のなかで吟味する一方で、歴史学者が史料分析から引き出した仮説を言語学者が言語分析により吟味する。この相方向で、言語学と歴史学とが協働することに挑み、ナチドイツの報道における言語統制という問題圏に迫った。

「言語統制方針の抽出と分析」（目的①）に関しては、W. A. Boelcke (編) の『戦時プロパガンダ 1939-1941—宣伝省秘密会議』(1966) および『総力戦—ゲッベルスの秘密会議 1939-1943』(1967) を一次史料とした。これらの会議議事録を綿密に読み進めることで、開戦後 (1939 年 9 月〜1945 年 4 月) の言語統制の方針を抽出した。「言語統制方針に従った報道文の抽出」（目的②）に関しては、『ハンブルク新聞』とナチ党中央機関紙『フェルキシャー・ベオバハター』を機械可読の文字データ化した。

４．研究成果

「言語統制方針の抽出と分析」（目的①）に関しては、宣伝省の言語統制の方針にどのような言語的な狙いと機能があったのかについて、修辞学とスローガン分析の観点で分析した。宣伝省報道会議では例えば、次のような言語統制が方針決定された。「《和平》という語は国民の戦意を減退させるので使用しない」(1939 年 12 月 11 日)、「戦争目的は《恒久平和と生存圏の保持》という表現で曖昧に示す」(1940 年 5 月 6 日)、「《イギリスによる組織的な飢餓づくり》というスローガンを用いる」(1940 年 6 月 23 日)、「チェンバレンを戦争の煽動者として際立たせる」(1940 年 10 月 3 月)、「戦争が続くことを明確に言ってはならないが、それがわかる言葉遣いをする」(1940 年 10 月 14 日)。これらの言語統制方針を修辞学の観点から分析すると、「選択・判断の誘導」（対比する、繰り返す）、「意図と事実の隠蔽」（意味をずらす）、「数による幻惑」（度数をずらす）に大きく類型化できることがわかった。スローガンについては、別途さらに「表示」、「評価」、「要求」という３機能を明確に表示できる次のような表記法を考案して、宣伝省の方針の実質的な狙いを吟味した。

「言語統制方針に従った報道文の抽出」（目的②）に関しては、『ハンブルク新聞』は 1930 年から 1945 年まで約 2 億 2 千万語のコーパスを、『フェルキシャー・ベオバハター』はウィーン版について 1938 年から 1945 年まで約７千万語のコーパスを作成し、この 2 つのデータからキーワード検索により関連する報道文の言語を抽出した。

「報道文における言語統制方針の反映をめぐる分析」（目的③）に関しては、例えば次のことがわかった。開戦の 3 ヶ月後に敗戦の可能性を隠蔽すべく、「われわれは降伏しない」から「われわれは勝利する」へのスローガン変更の方針が決定され、実際にこの新しいスローガンが新聞

で繰り返し報道された。1939 年末～1940 年春の宣伝省会議で「Frieden（平和）という語を 報道文で慎しむべし」という方針が決定され、実際に『フェルキシャー・ベオバハター』でこの語の使用が 1940 年に前年と比べて半減した。他方で、方針が実際の報道に反映されなかった例としては、1940 年 5 月に戦争目的を意図的に曖昧に表現して「恒久の平和と国民の生存圏（Lebensraum）のために」という表現を繰 り返すことが指示されたが、「生存圏」という語自体はどちらの新聞でも前年の 1939 年に最も多く用いられ、1940 年以降は使用が逆に減少していることを挙げることができる。

本研究の成果は、統制された言語表現を前にしてわれわれはそれをどう見分けどう聞き分けることができるかについて、本研究の成果は特定の示唆を与えるものと位置づけることができる。また、言語学的な分析から得られた研究成果をナチ時代の言語統制やジャーナリズムに関する歴史学研究の知見と結びつけることによって得られた言語学的成果は、歴史学的な検証にも耐えうるものであると同時に、ナチ時代を超えた中長期的な歴史的変化のなかに位置づけることも可能であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 高田博行	４．巻 56
２．論文標題 ナチ語彙Luegenpresseという神話ー言語史と現代史の視点から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ドイツ研究（日本ドイツ学会）	６．最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川喜田敦子	４．巻 55
２．論文標題 書評：『戦後オーストリアにおける犠牲者ナショナリズム ―戦争とナチズムの記憶をめぐって―』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ドイツ研究（日本ドイツ学会）	６．最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hiroyuki Takada	４．巻 15
２．論文標題 NS-Lexik bei Bjoern Hoecke. Auf dem Pergament der Hypertextualitaet	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Aptum. Zeitschrift fuer Sprachkritik und Sprachkultur. (Bremen, Germany)	６．最初と最後の頁 236-257.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Atsuko Kawakita
２．発表標題 Opfer und Taeter in der japanischen Erinnerungslandschaft
３．学会等名 53. Deutscher Historikertag. Sektion “Opferkonkurrenzen in Erinnerungskulturen: Deutschland, Israel, Japan, Suedkorea”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高田博行
２．発表標題 言語データが暴くナチ語彙Luegenpresseという神話
３．学会等名 ドイツ学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川喜田敦子
２．発表標題 記憶―共に生きる未来のために　ドイツ人にとっての 「被害」の語りから考える
３．学会等名 記憶の文化を育む⑦（ホロコースト 教育資料センター）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高田博行
２．発表標題 人のこころと社会の有り様を描くドイツ語史記述の系譜
３．学会等名 日本英文学会（第91回大会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroyuki Takada
２．発表標題 Pragmatik im Woerterbuch. Johann Christoph Adelungs frueher Beitrag zur Gespraechsforschung
３．学会等名 Deutscher Sprachgebrauch im 18. Jahrhundert: Sprachmentalitaet, Sprachwirklichkeit, Sprachreichtum. (Universitaet Eichstaett, Germany)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsuko Kawakita
２．発表標題 Zwei Vergangenheiten, Zwei Vergangenheitsbewaeltigungen -Deutschland und Japan-
３．学会等名 Vergangenheitsthematik in Japan, Deutschland und Australien（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Arend Stefanie, J. Klaus Kipf, Reinhard Gruhl, Hiroyuki Takada et al.	４．発行年 2021年
２．出版社 De Gruyter	５．総ページ数 958
３．書名 Fruehe Neuzeit in Deutschland 1620-1720. Literaturwissenschaftliches Verfasserlexikon. Band 3.	

１．著者名 大島隆之、高田博行	４．発行年 2020年
２．出版社 集英社	５．総ページ数 288
３．書名 独裁者ヒトラーの時代を生きる	

１．著者名 井出万秀、川島隆、高田博行ほか9名	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 265
３．書名 ドイツ語と向き合う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川喜田　敦子 (Atsuko Kawakita) (80396837)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関